

令和元年6月14日現在

機関番号：34418
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2018
課題番号：24720140
研究課題名(和文) シャーロット・ブロンテの一人称小説の形成と発展 18C書簡体小説との関連において

研究課題名(英文) Research on the Formation and Development of Charlotte Bronte's First Person Narrative and Its Connection with Eighteenth-Century Epistolary Novels

研究代表者
馬淵 恵里 (MABUCHI, Eri)
関西外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00612912
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：1829年から40年にかけての習作時代に執筆されたC.ブロンテの初期作品のうち所在不明の原稿を除く全作品に目を通し(未出版の原稿は英国の所蔵先で閲覧)、初期作品全体における語りの技法、形式、その特質およびそれらの発展・変容過程について、公刊された小説とも関連づけながら体系的な分析と考察を行った。また、C.ブロンテの一人称語りの技法と18世紀書簡体小説との関連性を探るために、18世紀書簡体小説に関する資料を収集して知識と理解を深めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

C.ブロンテの初期作品に関する研究は十分に進んでいるとはいえないなか、習作時代のC.ブロンテの物語や物語創作に対する意識とその変化もふまえながら、初期作品における語りの技法・形式の形成と発展の全体像を明らかにし、公刊された3小説で用いられている自伝体形式へと至る流れを提示できたことは、特に小説技法や形式の点で、初期作品のみならずC.ブロンテの作品研究全体の更なる発展にささやかながらも貢献できたものと思われる。

研究成果の概要(英文)：In this research, I perused all of Charlotte Bronte's juvenile works written between 1829 and 1840 (except missing pieces) by utilizing published texts and manuscripts and also by consulting unpublished manuscripts and transcriptions in the United Kingdom. Then I examined distinctive narrative features and experiments in her juvenilia and made an analysis of overall narrative forms and techniques. I revealed how and why her narrative forms and techniques had changed over years and considered what had led her to use the form of fictional autobiography in her mature novels. After finishing these works, I then began to study eighteenth-century epistolary novels and explored a possible connection between the first-person narrative style of eighteenth-century epistolary novels and that of Charlotte Bronte.

研究分野：英文学

キーワード：シャーロット・ブロンテ 初期作品 書簡体小説 小説形式

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

博士論文で、ジェイン・オースティンの小説における書簡の機能の変容、シャーロット・ブロンテの自伝体小説の特質について考察し、博士課程修了後、C.ブロンテの『ヴィレット』内での呼称の使い分けが、自伝体形式で書かれた同小説における登場人物間の距離の調整や重層的な語りを可能にしていることを検証するなかで、C.ブロンテの一人称語りの技法をより詳しく考察するとともに、その語りの特質を文学史的な流れの中で捉えることはできないかと考えるようになった。

そのような折に、申請当時はほぼ未着手であったC.ブロンテの初期作品を概観したところ、彼女の公刊された小説のほとんどは一人称自伝体小説の形式で書かれているが、10年以上に及び習作時代に書かれた初期作品の語りの形式はバラエティに富み、読者を強く意識した編者・語り手・作者から成る複雑な語りがすでに実践されていることに強い興味を持った。そこで、国内外でまだ十分に進んでいるとはいえないC.ブロンテの初期作品の語りについて、その技法や変遷を体系的に分析して彼女の一人称小説の形成と発展の全体像を明らかにし、さらにそれを18世紀から続く文学史的な流れの中に位置づけるべく、同じく一人称語りで展開され、特に女性作家の作品に大きな影響を与えた書簡体小説との関連の中で捉えることを考えるようになった。

2. 研究の目的

(1)C.ブロンテの初期作品にみられる語りの技法の特質やその変容についての分析

入手可能なすべての初期作品を読み、習作時代の語りの技法や形式、その特質や変容について分析してC.ブロンテ作品における一人称小説の形成・発展の全容を明らかにする。その際、公刊された4つの小説で用いられている語りの形式やその特徴との関連性もあわせて検討する。

(2)18世紀書簡体小説との関連についての考察

18世紀書簡体小説に関する知識・理解を深め、18世紀書簡体小説との関連の中で、(1)で得られたC.ブロンテの一人称小説の形成と発展の全体像を考察することにより、両者の接合点を探る。

3. 研究の方法

(1)出版されている初期作品の確認

クリスティーン・アレグザンダー編 *An Edition of the Early Writings of Charlotte Brontë* (全2巻計3冊)、トマス・J・ワイズおよびジョン・A・サイミントン編 *The Miscellaneous and Unpublished Writings of Charlotte and Patrick Branwell Brontë* (全2巻)、ウニフレッド・ジェラン編 *Five Novelettes* に大半の初期作品が収録されているため、まずはそれらに収録されたすべての初期作品に目を通す。その際、代表的な初期作品は、Penguin Classics、Oxford World's Classics から出版されている初期作品集にも収録されているため、注を適宜参照する。また、初期作品群を解説した、アレグザンダーの *The Early Writings of Charlotte Brontë* および岩上はる子氏の『ブロンテ初期作品の世界』、『シャーロット・ブロンテ初期作品研究』を参考にしながら、初期作品の概要や全体的な流れを把握する。

(2)出版されていない初期作品原稿の閲覧・確認

C.ブロンテの手稿目録 *A Bibliography of the Manuscripts of Charlotte Brontë* や、上記のアレグザンダー、岩上両氏の研究書に載せられた書誌情報をもとに、未出版の原稿をその所蔵先である Brontë Parsonage Museum や Leeds 大学図書館等で閲覧・確認する。

(3)初期作品にみられる語りの技法や形式の特質およびその変容に関する分析

(1)、(2)を通して、初期作品全体における語りの技法や形式、その特質や変容について、公刊された4つの小説との関連性もふまえて考察する。

(4)書簡体小説についての研究と(3)との関連付け

18世紀書簡体小説に関する資料を収集して知識と理解を深め、最終的には、(3)で明らかとなったC.ブロンテの初期作品さらには彼女の文学作品全体における一人称小説の形成と発展の全体像と18世紀書簡体小説との関連性を考察する。

4. 研究成果

(1)研究の主な成果

初期作品にみられる語りの技法や形式の特質およびその変容に関する分析について

アレグザンダーが編集を手掛ける初期作品集の第三巻が現在もなお未刊行のままとなっているため、後期習作には未出版の作品や断片が複数含まれているが、このたびの助成を受けて、その所蔵先である Brontë Parsonage Museum を複数回訪れ、直筆または筆写原稿を調査・閲覧することができた。それによって、所在不明となっている原稿を除くすべての初期作品を読むことができたことは、初期作品の全容を正確に掴むうえでまずもって非常に有益であった。

このようにして1829年から40年にかけて執筆された多数の初期作品をすべて確認したあと、

改めて各作品で用いられている語りの形式を整理・分析し、C. ブロンテがどのような語りの問題に直面しそれにどう対処したのか、またそうする中で語りの形式がどのような変化を遂げたのか、そしてまた、初期作品に残された課題が、なぜ・どのようにして、彼女を自伝体小説へと向かわせたのかについての考察をまとめたものが、「シャーロット・ブロンテの語りのスタイル 初期作品の 1 人称語りをめぐって」(口頭発表)および「アングリヤ物語から自伝体小説へ シャーロット・ブロンテの初期作品にみる語りの変遷」(『英語のデザインを読む』に収録)である。具体的には、彼女が物語の語り手やいわゆる内在する作者と自分自身とを明確に区別するようになるのと時期をほぼ同じくして、物語の作者兼語り手として、物語世界の一住人である男性ペルソナ チャールズ・ウェルズリー が 1829 年末に登場し、まもなくチャールズを語り手とする語り手 = 作中の観察者タイプの一人称語り が主流となること、1830 年から 34 年にかけて同形式で執筆された作品において C. ブロンテが直面した語りの問題とそれへの様々な対処法、1835-36 年以降の作品にみられる語り手チャールズの変容と彼を語り手に据えた二種類の語りの形式について明らかにしたうえで、習作時代末期にリアリズムへの強い意識が芽生えるなかで、語り手 = 観察者タイプの一人称語りに必ず付随する語りの問題に悩まされることなく同形式を活用するための一つの解決策として自伝体形式に行き着いたのではないかと結論づけた。

初期作品で半ば実験的に用いられている様々な語りの技法・形式とその変遷は、習作時代の C. ブロンテが物語をどのように構築し提示していたのか、自ら築いたその虚構の世界が彼女にとってどのような意味を持つものであったのかという点とも深く結びついている。この点について、彼女が筆名として、また物語の作者兼語り手として長らく用いていた男性ペルソナ「チャールズ」を切り口に考察したのが「チャールズ・ウェルズリー『習作』 若き作家のアイデンティティ」(『ブロンテ姉妹と 15 人の男たちの肖像』に収録)である。この論文では、C. ブロンテにとっての創造世界と創作活動の意味は習作時代を通して少しずつ変化しており、創作活動を始めたばかりの頃は、故意に事実を歪めておもしろおかしく書くという行為そのものをきょうだいと楽しんでいたが、次第に内在する作者と自分自身とを区別し、物語という虚構の世界における事実と虚構とはいったい何なのか、またそれらをどのように提示するかということ、読者の存在も意識しながら考え始めるようになり、やがてはアングリヤ物語という壮大な虚構の世界を離れ、自分が生きる現実世界に目を向けるようになっていくという、C. ブロンテの作家としての成長や自己形成の軌跡を、語りの技法・形式とその変化をもとに分析している。

イギリスでの初期作品原稿調査中に収集したその他の草稿に関する分析・考察について

Brontë Parsonage Museum にて未出版の草稿を調査・閲覧中に、思いがけず、公刊された 4 つの小説の破棄された断片(とくに小説の書き出し部分)が同館に保管されていることを知り、初期作品に加え、それらの草稿もあわせて確認することができた。その中でも『ジェイン・エア』冒頭部の初期草案と思しき約 400 語の無題の断片は、未出版のため入手困難な貴重なものであるが、その破棄された断片から推察すると、C. ブロンテは当初、『ジェイン・エア』で使用している一人称語りとは異なるタイプの一人称語り 初期作品で多用されている語り手 = 観察者・証人タイプの一人称語り か三人称語りのいずれかで物語を執筆しようとしていたことがわかる。これは、習作期から成熟期の 4 小説に至る小説形式の変化と発展という点から興味深い発見であり、これについては、その他の破棄された断片とともに、「創作の軌跡が示す『語り』の探求 『教授』と『ジェイン・エア』の草稿をめぐって」(『石田久教授喜寿記念論文集 イギリス文学と文化のエートスとコンストラクション』に収録)の中で詳しく論じている。

なお、C. ブロンテは、初期作品の舞台となる架空のグラスタウンおよびアングリヤの世界を、長きにわたり弟のブランウェルと共同で創造しており、物語内の登場人物や出来事、物語展開はブランウェルの初期作品と連動しているため、C. ブロンテの初期作品の内容を正確に理解するためにはブランウェルの初期作品も適宜参照する必要がある。物語展開上重要なアレグザンダー・パーシーの妻メアリの死に関するエピソードが書かれている未出版のブランウェルの草稿 “Death of Mary, Wife of Northangerland” (推定執筆時期: 1834 年 9 月)を、イギリスへの調査出張時に Brontë Parsonage Museum と Leeds 大学図書館で確認したところ、それは、ヴィクター・ノイフェルトが編集したブランウェルの初期作品集 *The Works of Patrick Branwell Brontë* 第 2 巻に “The Life of Alexander Percy Vol. III” (1835 年末)というタイトルで収録されている散文の断片と同一のものであることが判明するといった予想外の収穫もあった。なお、本研究課題を遂行する過程で同時に閲覧・収集したブランウェルの初期作品や詩の直筆原稿は、論文「パーシーとメアリの別れ 『すべての終わり』にみるブランウェル最晩年の詩の特徴」(『文藝禮讃 アイデアとロゴス 内田能嗣教授傘寿記念論文集』(2016)に収録)で活用している。

(2) 得られた成果の位置づけ、インパクト

入手しづらい書籍や未出版の原稿もあり、C. ブロンテの初期作品に関する研究は、国内外で十分に進んでいるとはいえない。C. ブロンテ作品全体をみても、語りという技法・形式面からの批評は決して多くはないなかで、初期作品群を網羅し、公刊された 4 つの小説への流れもふまえた体系的な語りの分析ができたことは大きな意味があるものと思われる。彼女の代表作で

あり日本でも広く読まれている『ジェイン・エア』を含む3つの小説が一人称の自伝体形式で書かれていることや、今なお彼女を主観的で感情的な作家と捉える傾向が少なからずあるため、C. ブロンテが語りの形式や技法というものに大きな関心を抱いていたとはあまり思われていない節があるが、幼い頃からフィクションそれ自体と、物語という虚構の世界をどう創り上げ提示するかということに強い関心を抱き、様々な実験的試みをしてきたことを、本研究を通して改めて論証できたように思う。また、彼女がなぜ一人称の自伝体形式を好んで用いるようになったのか、そこに至るまでの経緯や過程を、初期作品における語りの技法・形式の変遷を通して明らかにできたことは、公刊された4つの小説の語りを考察する際にも役立つのではないかと思う。

(3) 今後の展望

補助事業期間中に18世紀書簡体小説とC. ブロンテの初期作品さらには彼女の文学作品全体における一人称小説の形成と発展の全体像との関連性について十分に考察し、何らかの知見を得るところまで到達できなかったため、それを今後の課題としたい。また、期間中に二度ほどジェイン・オースティンの小説技法についての論文や口頭発表原稿を準備することがあったが、その作業を通じて、18世紀書簡体小説の流れと影響を直接受けているオースティンについてももう少し深く考察したいという気持ちになった。オースティンは習作時代に書簡体形式をよく用いていたが、公刊された6つの小説はすべて三人称形式で書いている。ただし女性主人公が主な視点人物となっている。点は、C. ブロンテとの対照で興味深い点である。オースティンも視野に入れながら、引き続きC. ブロンテの小説形式・技法と18世紀書簡体小説の関連性を探ってみたいと思っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

MABUCHI, Eri, "Name Manipulation as Encoding: Narrative Strategy of *Villette*" (『英文学研究支部統合号』第5巻(『関西英文学研究』第6巻), 2013, pp.1(143)-11(153)、査読有。DOI:10.20759/elsjregional.5.0_143)

〔学会発表〕(計3件)

馬淵恵里、「シャーロット・ブロンテの語りのスタイル——初期作品の1人称語りをめぐって」(阪大英文学会第46回大会シンポジウム、於大阪大学、2013.)

〔図書〕(計3件)

馬淵恵里、「チャールズ・ウェルズリー『習作』——うら若き作家のアイデンティティ——」(岩上はる子・惣谷美智子編著、『ブロンテ姉妹と15人の男たちの肖像——作家をめぐる人間ドラマ』、ミネルヴァ書房、326頁、2015、pp.155-174.)

馬淵恵里、「アングリア物語から自伝体小説へ——シャーロット・ブロンテの初期作品にみる語りの変遷——」(沖田知子・米本弘一共編、『阪大英文学会叢書8 英語のデザインを読む』、英宝社、253頁、2015、pp.28-40.)

馬淵恵里、「創作の軌跡が示す『語り』の探求——『教授』と『ジェイン・エア』の草稿をめぐって」(石田久教授喜寿記念論文集刊行委員会編、『石田久教授喜寿記念論文集 イギリス文学と文化のエートスとコンストラクション』、大阪教育図書、476頁、2014、pp.81-91.)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

無

(2) 研究協力者

無

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。